



第十八卷 第三號

(通卷第七十一號)

昭和八年七月發行

研 究

オリントスの陥落(上)

原 隨 園

序

- 一、オリントス
- 二、アテナイの動向
- 三、アンタルキダス條約
- 四、ギリシア再生の力

序

オリントスの攻略は、外交の方面からみても興味ある問題であるが、今は、オリントスの陥落がギ

オリントスの陥落

第十八卷 第三號 三九三

リシア史の發展の上からみて如何なる意味を有するかを略説したい。アレクザンドロス大王の東征によつて開かれるヘレニスム世界が、一つの世界的帝國を形成するために、都市國家が如何にこれに向つて無力を示したか、又世界帝國に先行してマケドニアが如何にギリシアの將來を約束したか、をオリントスの陥落は示して居るのであつて、かのカイロネイア Chironia にギリシアの聯合軍が敗れたことは、むしろオリントスの陥落によつて決定されたことを更に確かめたといふにすぎないのではないか、といふことを一應考へてみたいと思ふ。

一、オリントス

オリントス Olynthos はカルキディケ Chalkidike 半島の最も重要な市である。

カルキディケ半島は、テルメ Therme 灣とストリモン Strymon 灣との間に突出せるマケドニア Makedonia の半島である。エウボイア Eubolia のカルキス Chalkis、エントリア Eretria 兩市の人々が前八世紀頃盛に此の地方に植民して傳説によると三十二の村を形成したと稱せらる。(Philippica Demosthenes III. 26)。此の地方がカルキディケと呼ばれるに到つたのはこの故である。此の地方は豊饒であるので食糧に不足を告ぐるところの諸國の常に羨望虎視せるところであつた。メンデ Mendē 附近シトニア Sithonia 半島における葡萄栽培、パレネ Palene 半島における蜂蜜、スタゲイラ Stageira 附近の鑛産その他、國內に密林多くして殊に東部よりは家屋船舶用の木材及び瀝青を産出する。

アテナイの僭主ペイシストラトス Peisistratos が再び國を追放された時に、彼はテルメの附近ライクロス Rhaukelos (イタドニアのアイノス Ainos の古名であり、ヘロドトス Herodotos VII. 123 にみゆるアイネイア Ainea であつて、カラウロン Kalauron 山脈の南麓にある) に植民し、次いでパンガイオン Pangaion 附近の地に遷り、此の地で大に資産を貯へて軍隊を備つたといふのも (Aristoteles, Athenaiou Politia, c. 15. §2)、その目的は全く此の地方の天産就中嶺山からの収益によつて勢力の基礎を固めんがためであつた。

カルキスに次いで早く植民運動を起したコリントス Korinthos も亦此の地方に着眼しバレネ半島にポテイダイア Potidaia を建設した(Thoukydides I 56)。それはペリアンドロス Perikandros の時だと稱せられるから(Nicolaus Damascus, fr. 60. FHG. III. p. 301, 58)七―六世紀の頃であり、僭主が海外に發展した時代であることを思へば、その建設の目的もほゞ推察するに難くはない。即ちコリントスの勢力は西北方においてはコルキラ Korkyra よりエピダムノス Epidamnus にのびたのに對して北方の中心としてポテイダイアが建設されたわけである。そして年々コリントスから統治者(Epidamnourgoi)が來て治めてゐたから、殆どその屬州の如くであつた(Thuk. I. 56)。ヘルシア戦役の際には、クセルクセス Xerxes の軍がテルメに到着した時に、アフィチス Aphytis, ネアポリス Neapoleis, アイガ Aiga, テランボス Therambos, スキオネ Skione, メンダ、サネ Sane 等バレネ半島の市々と共に

船舶と兵員とを提供したにとどまるが(Hdt. VII. 1, 23) サラミス Salamis の海戦に敗れてクセルクセスが歸國を急いだ時には、ボテイダイアは忽ち離叛した。ペルシアのアルタバゾス Artabazos は三ヶ月に亙り、海陸から必死に此の市を攻圍したが遂に失敗に歸したのであつた(Hdt. VIII. 126—129)。アルタバゾスの行動についてヘロドトスは單にペルシア王を護衛したと稱するのであるが、むしろ交通路の保安の意味をもち(cf. Grundy, The great persian war and its preliminaries p.429)トラキア Thracia マゲドニア及び北ギリシアにおけるペルシアの勢力を確保せんがためであつたかと思はれる。此の時オリントス Olynthos もボテイダイアの向背にならつて離叛の形勢にあつたのでアルタバゾスは直ちに攻めて之を降したとヘロドトスは傳へてゐる。是等の消息からボテイダイアが、ペルシア戦役の頃にはカルキデイケの指導的な市であつたことが考へられるのである。ペルシア軍が三ヶ月に亙つての攻撃が效を奏しなかつたことからみてしらるゝ如く要害の地である。即ちバレンネ半島の頸部を占めテルメとトロネ Torone との二つの灣に向つて城壁が連つて居り海軍を率ゐなければ之を占領することが出来ない。従つてまた此の地を制すれば、バレンネ半島の諸市例へばメンデとかスキオネ等は全く陸路からの聯絡を失ひ、孤島の如くなるの他はない(Thuk. IV. 120)。それほど形勝の地を扼してゐたのである。

かくの如きボテイダイアはカルキデイケの中心であり、従つて此の半島に進出せんとするものは先

づ之を手に收むべきであることは、ペルシア軍の行動に徴しても明かである。だからアテナイがペルシア戦役の後に、盟主として海上に發展するやポテイダイアも之に加盟せしめられてゐた。コリントスがその本來の勢力を奪回せんとしたことが、實に、ペロポネソス戦役の一つの動因となつたのである。アテナイの攻圍は約二年に亙り約二千タラントンの軍費を消費して居る (Thuk. II, 70) のを以てみてもその頑強なる抵抗力をみるべきである。勿論これについてはスバルタ、コリントス、マケドニアの援助があつたことを思はねばならないが、かく諸國が後援を志しただけ、それだけに、ポテイダイアの重要性が考へられなければならない。その他近隣の諸市の後援もあつたので、それは又此の地方におけるポテイダイアの勢力をみるに足るのである (cf. Thuk. I, 88—90)。然し乍ら、四三〇—四二九年の冬に遂に陥つて、アテナイは稍々條件に不満ではあつたが、之に約一千の市民を送つて自國の植民地となし (Thuk. II, 70, Diodoros XII, 46)、之よりカルキデーケにおける勢力がオリントスに移るのである。

ペロポネソス戦役の當初において、かくの如くギリシアの列強が此の地點の争奪に力を注いだこと並びにマケドニアのペルディカス Perdikas が之に參與してゐること、更にアテナイの攻撃が此の時、同時にマケドニアにも向つてゐることは、ポテイダイアを根據として、マケドニアの内地に對する關係が重要性をもつて來たことを示すものである (cf. Grundy, Thucydides and the history of his

age pp. 373—4)。

オリントスはボテイダイアからの距離僅かに六十スタディオン Stadion 即ち三里強であつて村を望見することが出来る位である (Thuk. I. 63)。ペルシア軍の進出の際には、自餘のトラキア、カルキディケの市々と同じ運命にあつた。本來は、ボツタイアイオイ Botthaioi が、マケドニア人のためにテルメ方面から追はれて占據して居たものであつた。クセルクセス敗走の時にボテイダイアと共に離叛したがために、アルタバゾスの突撃を蒙り、住民は盡く慘殺され、市はトロネのクリトブロス Kritoboulos 及びカルキディケの人々に興へられたのであつた (Hel. VIII. 127)。ペロポネソス戦役の當初にも、ボテイダイアと行動を共にしてアテナイに反抗した。此の時マケドニア王ベルディッカスの勸告により、沿岸の市々は、アテナイの海軍の襲撃をさけて凡て内地のオリントスに集まり、堅壘を築いて防禦の陣を張ることとなつた。ペルディッカスは、ボルベ Boibe 湖畔の自領ミグドニア Mygdonia の一部をさいて、戦の繼續する間之を耕作することをオリントス市民に許したのである (Thuk. I. 58)。之が將來オリントスの大に發展する基礎となつたものであつて、海軍なくしてボテイダイアを攻撃しえざる如く、強大なる陸軍なくしてオリントスを陥れることは不可能であつた。だから危険に迫ると近隣の婦女子が難をオリントスに避けたものである (Thuk. IV. 123)。

アテナイはボタイダイアを封鎖しつゝ、オリントスを攻めたが失敗し、將軍カリ阿斯 Kalias は戦死した (Thuk. I. 62-63)。殊にスバルタの名將ブラシダス Brasidas が北方に活躍して後はオリントスは敢然としてアテナイに對抗しつゝけることが出来たのである。かくてニキアス Nikias の和議によつてオリントスはアテナイの勢力から獨立を確保され (Thuk. V. 18, 5)、而もアテナイ人の守れる海港メキベルナイ Mekybernai を突如攻撃して占領したから (Thuk. V. 39)、海上との連絡も可能となつたわけである。是に對してアテナイは、シシリ遠征とその失敗によつて何等の抗議にも及ばなかつた模様である。かくしてオリントスは今やボタイダイアに代つてカルキデイケの中心となりしのみならず、四世紀に入つては、トラキア沿岸の諸市の中の最大のものとして知らるゝに到つた (Xenophon, Hellenica V. 2, 12)。

ペロポネソス戦役の間に、近隣の諸市がオリントス市に結集して以來は、オリントスは實にカルキデイケの住民の中心であり、カルキデイケ人といふ稱呼は實は此のオリントスを中心とせる集團をさすと考へられる (cf. Thuk. I. 62)。かくして此の集團は恰かも一國の如くにその領事 Proxenoi をもち (Thuk. IV. 78) 使者を派し (Thuk. IV. 83) 外國と同盟を結んでゐるのである (Thuk. V. 31)。殊にニキアスの平和の後には、一種の同盟的結束を擴大した。四一四年以後は、史料が欠乏してゐるので、かゝる同盟が存続したりや否やは不明であるが、クセノフォンの記述によれば、是等の諸市が同一の

法をもちて一つの都市聯合 (Sympolitai) として結束したるが如くであり、その中心は固よりオリントスであつた (Xen. Hel. V. 2, 12)。かくの如き結束は、蓋しマケドニアの勃興に對抗して促進されたことは疑なからず (Hermann Swoboda, Lehrbuch der griechischen Staatsaltertümer §25)。

以上略説する如く、カルキディケは、「その國自身に船材をもち、多くの港灣と市場とをもち、食糧も豊富で多數の人口をもつてゐるので」(Xen. Hel. V. 2, 16) 早くからギリシア本國の市々の視ふところであり、ペロポネソス戦役を境として、それ自體の間からオリントスの市を中心として一つの強大なる勢力を出現させた。而もマケドニアの勢力がギリシア本國を排して次第に海岸に伸張するや此の地點が角逐の焦點となり、オリントスは兩勢力の間に介在して離合したのである。アテナイが此の地方を失つたことは、ひとりアテナイの政治的敗局をもたらしたのみならず、ギリシア都市國家の倒産を意味し、マケドニアが此の地方を獲得したことは、ひとり王國の完成をえさしめたのみならず、世界帝國へ向つての最初の布陣となつたのである。即ちギリシア諸市が都市國家に復歸すべきか、はた、世界帝國に進むべきかの運命の決定は、實にオリントスをアテナイが失つてマケドニアが占領したその日にあつたのではなからうか。

二、アテナイの動向

六世紀の終りまでに、アテナイの市においては氏族制度が崩壊して純粹な都市國家として更生してゐた。貴族 Eupatridai と稱せられる身分のものも、必ずしも昔ながらの門閥ではなくして、アポロン・パトロオス Apollon Patroos を祖先神として崇拜して居り、イオニアの勢力の浸潤を示して居る(西洋史研究第三輯拙稿參照)。大衆 Plethos と呼ばれて土地をもたない民衆は都市に集中し、海上へ、手工業へと向つた。かくして船材と食糧との輸入が切迫した必要となつた。

小アジアのギリシア諸市は一步早くかゝる精神的、物質的又社會的變化を經過してゐた。ヒパニス Hypanis (Bug) 河口のオルビア Olbia は穀物の輸出港であるが、(Hdt. IV. 17-18) 此の地を中心とした黒海北岸の文化圏は七—六世紀には文化的に一團をなして居り、ミントス Mintos, アイオリア Aiolia, ロドス Rhodos, ナウクラチス Naukratis, クラツォメナイ Klazomenai 等において製造された小アジア的イオニア的な陶器、金細工の出土をみて居る (Stern, Die politische und soziale Struktur der Griechencolonie am Nordufer des Schwarzmeergebietes. Hermes XV. SS. 161-224)。だから小アジア殊にイオニア地方は食糧を此の地に求めつゝ生産品を販布して居たものと考へられる。それがベレザン Berezan における發掘によると、六世紀の終には、イオニアの文明は新興のアツチカ文明によつた壓倒されてゐる。それはひとりベレザンのみにとゞまらずしてオルビア、パンチカバイオン Pantikapaion, ファナゴリア Phanagoria, ゴルギッピア Gorippia 等においても同様の現象をみると報告

たれつゝる (Stern, Die griechische Kolonisation am Nordgestade des Schwarzen Meeres im Lichte archäologischer Forschung. Klio IX. SS. 136-152)。即ちアテナイにおいては、イオニア方面よりも一歩おくれでは居るが、同様の経過をたどつて黒海地方に食糧を求めて居ることが知られる。それはソロン Solon, ペイシストラトスがトラキアのケルソネッス Chersonesos Thrakike, シグイオン Sigion 等への進出によつて知らるゝところである(歴史と地理二七卷四號、アテナイの民主政治と農民入節参照)。

さて小アジアのギリシア都市は、沿岸に定着して産業を營み、農耕のことは賤民に委ねて居り、内亂がたえない。且つ外敵に對して強大なる武力的統制をもたなかつたので、リディア Lydia, アッシリア Assyria, ペルシア等とつぎつぎに朝貢を餘儀なくされてゐた。此のペルシアの勢力が黒海にのびトラキアに入るに及んで、アテナイはシグイオン、ケルソネッスを失ひ、糧道は危険にさらされた。茲にペルシア戦役が起つたのである。

ペルシア戦役に次いでアテナイの全盛期が到來した。然し乍らアツチカカ土地はペルシア軍の劫掠に委ねられたことを思はねばならない。

スパルタによつて代表さるゝドリス的國家が、征服による都市であり、寡頭的基礎に立つとするならば、アテナイによつて代表さるゝイオニア的國家は、合同 Synoikismos による都市であり、民主

的根據に立脚し、法の前に平等 *Isonomia* であることが要求された。アテナイの貴族はペイシストラトス、クレイステネス (*Kleisthenes*)、ミルチアデス (*Miltiades*)、アリストイデス (*Aristeides*) 等々個人としては俊秀が出てはゐるが、既に身分としてはその勢力を失ひつゝあつた。今やそれらの貴族の勢力の根柢をなす土地が荒廢したのであつて、浮浪の徒が海上に勝利をえて彌々擡頭するのと反比例して、貴族は沈淪の downward 道をとつた。

「ペロポネソス戦役及びそれに引きつゞいた三十人僭主の内亂によつて公私のオリイヅは伐採され焼却された」 (*Lysias* 7. *Pari tou sekou* §6, §24)。オリイヅはアツチカ農産の主要品である。かくて貴族は積極的に基礎が動搖した上に、課税獻金 *leitourgia* が相ついで徴發されて貴族は全く衰滅に瀕して居た。「嘗て平和の時に吾々の家は八十タラントンの財産をもつてゐたが、戦の時に、國家救護のために全部を犠にした」と或る貴族はいつてゐる (*Lysias* 26. *kata Euandrou* §22)。ニキアス *Nikias* は一〇〇タラントンをもつてゐたが、その子ニケラトス *Nikeratos* は四〇四年には僅かに一四タラントンを殘してゐたにすぎない。カリアス *Kallias* は最も富裕なアテナイ人で二〇〇タラントンをもつてゐたといはれたが、その孫の同名カリアスは戦後には殆んど窮乏に落ちてしまつた (*Baloch*, *Die Attische Politik seit Perikles* S.6)。戦役以來新たに富豪となつたものには、身分の賤しいものがある。デイフィロス *Diphilos* の如きは、デモステネスの時代におけるアテナイの最も富めるものと稱

せられるが、彼は鑛山師であつた。又銀行家のパシオン Pasion は在留外人 Metoikoi であり、クレオン Kleon、アニトス Anytos、父デモステネスなどは手工業者であつた。

門地と富と教養とが三位一體であつたのは既往の姿である。今や門地はいはず、富と教養とそれのいづれをとつたかといふに、「貧しくして教養のあらむよりは、愚なりとも家に富を擁する方が好い」のであり (Kriias fr. 29 Diels)。「奴隸と雖も富めば尊敬せられるが、自由民と雖も貧しければ顧みられな」のであつた (Euripides fr. 142)。アリストイデス、エフィアルテス Ephialtes、ペリクレス Pericles などの努力によつて、アテナイの民衆には参政權の平等がえられたけれども、その代議制には欠陥があつて遠隔の地の者は参加する機會乏しく、集るものはアテナイの住民とピレウス Peiraeos の住民くらゐのものであつて、概ねその日暮らしの浮浪者であり、殊に四世紀のはじめからは參議者に給料を與へるようになったので彌々貧民の參集する傾きを助長した。教養なき彼等の求むるところは富であつた。彼等が負債の免除や土地の再分配を期待したことはアリストファネス Aristophanes の喜劇 EkKlesiazousai やプラトン Platon の理想國やリクルゴス Lykourgos 傳説などにみることが出来る。又富豪が訴へらるれば忽ち財産の沒收が行はれることや、軍事植民地 Kerouchia の設置による土地の分配は、かゝる期待を幾分か實現したものといつて好い。クレオン Kleon は借金があつたが政治家業をやり出してから一五タラントンの富をえたとか、テミストクレスをはじめ三タラントン

の遺産を相續したのであつたが一〇〇タラントン以上の資産家になつたとか傳へられてゐる (Kritias, Fr. 8 FHG. II. P. 70)

かくの如くにしてアテナイの民主政治は無産者の無定見なる政治となつた。戦についても有産者、農民は平和を欲する。戦は彼等の堅實なる歩みを攪亂するからである。無産者はひたぶるに戦を主張する。敗れても失ふ物なく、勝利に萬一の收穫が期待しえられるからである (cf. Aristoph. Ekklies. 1975. Aristoteles, Politica IV. 13. 1297b)。シシリ遠征の動機もアルキビアデス Alkibiades が名譽と富とを得んがためであるとツキヂデスは評してゐる (VI. 5)。かくの如きアテナイの議會に對する不信はアリストファネスの屢々表明せるところであり (Lysistratam, Ekkliesiazousai)、アテナイ市民も、シシリ遠征失敗後には、遂に十人の先議委員會 Probolioi を選んで最善をつくさしめんとした (Thuk. VIII. 1 Aristot. Athenaiou Politia, c. 29 §2)。かくして民主政治の弱點は暴露されて、民主政治の本據たるアテナイにすら寡頭的傾向の成起を餘儀なくするに到つた。

然らばアテナイの民主政治の無力とその寡頭的傾向とは、果してドリス的主張の勝利であつたか。ギリシアの將來はスバルタの唱覇 Hegemonia によつて更生しえたであらうか。

なる程ペロポネソス戦役はスバルタの勝利に終つて居る。然しながらその勝利はスバルタの獨力によつて完成されたのではなかつた。既に一言した如くにペルシア戦役におけるペルシアの敗北は、

ペルシア自身の没落ではなかつた。ペルシアは依然として東方の強者であつた。たとひ、アテナイより阻止せられてゐたとはいへ、そのアシアにおける代官チツサフェルネス Tisaphernes をして小アジアの都市から貢賦を徴發せしめて居たのである (Thuk. VIII. 5)。

チツサフェルネス等のペルシア方は、アテナイの勢力を牽制せんがために、一方小アジア、多島海へレスポント地方の諸市をアテナイより離叛せしめんとすると同時に、他方ラケダイモンと提携せんことを企てたのであつた。ペルシアとラケダイモンとの同盟條約はツキヂデスの八卷、一八、三七、五八の三節にみえるが、次第にラケダイモンを後援する意味が明確になつてゆき、最後の節においては、スバルタ及び同盟の艦隊に向つての資金支給に關して明記してゐるのである。此の同盟は有形無形にアテナイを壓迫したものであり (cf. Arist. Ath. Pol. c.29 §1) アンギヌサイ Arginousai に大敗しながら翌年アイゴスポタモイ Aigospotamoi にはより以上の艦隊を備へることを可能にしたのである。

此の時にリサンドロス Lysandros は富を祖國にもたらし、自分自らは金錢に淡泊でありながら、スバルタ國民をして金錢を愛好せしむるに到つたと批難されるほど莫大な富がスバルタに流入した (Ploutarchos, Lysandros c.2)。是れ海上に進出した結果でもあるが主としてペルシア方の軍費提供におふものである。實際リサンドロスの乞に應じてペルシアは軍費を出したが (Ploutarchos, Lysandros c.4) 次の將軍カリクラチダス Kallikratidas は本國から艦隊の維持費をえんとするも能はず、ギリシア諸

市も窮乏にあるの故に徴發せず、遂に心ならずもペルシアに之を求めたのであつた。そして、その志をえざるや従來の司令官が外人に媚び、彼等をしてその富のために不遜ならしむるに到つたとペルシアを罵つてゐるが (Plut. Lys. c. 6)、かくの如く、ペルシアの富によつて、スバルタは優勢をちえたものであつた。そしてこのことは單に有形的にスバルタを支持したといふだけではなく、アテナイの内部にさへペルシア王の意嚮といふものが斟酌されて改革が行はれるに到つた (Aristot. Ath. Pol. c. 29 §1)。だからペロポネソス戦役は、一見ドロシスの主張の勝利であり、スバルタのリサンドロスは神ならぬ人間にしてはじめて神と祭られ (Plut. Lys. c. 18)、アテナイの開城の日よりギリシアに自由がはじまるとたゞへられてゐるにもかゝはらず (Xen. Hell. II. 2, 23) それらはみな表面にあらはれた波動にすぎない。實相はペルシアの操作的役割を考慮して眺められなければならぬ。

三、アンタルキダスの條約

アテナイの開城後内訌が納まつて間のない頃、一萬三千のギリシア傭兵はキロス Kroisos の叛亂に參加した。傭兵はペロポネソス戦役以來俄かに隆盛となつた新職業であつて、戦争がなくなることは彼等の生活の脅畏であつた (史學雜誌昭和七年十一月拙稿參照)。だからキロスの叛亂に參加したとしてもそれは、彼等にとつては生活の一段たるにすぎなかつた。然し之がためにスバルタとペルシアとの關係を阻隔した。スバルタにしてみれば、リサンドロス以來 (Plut. Lys. c. 3) 小アジアにおいて得

たる勢力保有のためにも戦を有利となし、小アジアの諸國をペルシアから離叛せしめんと期待し、アゲシラオス Agesiāos はほゞその目的を達したのであつた (Xen. Hell. IV. 1, 41. Plut. Agesiāos (cc. 9—16)。ペルシアの觀點からすれば、アテナイを牽制するためにこそスバルタを後援する必要もあつたのであるが今となつては反つてアテナイよりも危険な敵といふべきであつた。だからアテナイのコンノン Konon に五〇〇タラン톤を與へて艦隊を編成指揮せしめてゐる (Diod. XIV. 39. Paus. I. 3, 1)。之によつてクニドス Knidos 沖の海戦 (二九四年) にスバルタは敗れたのである (Xen. Hell. IV. 3. 10—12)。ペルシアの軍資によつて確立したスバルタの艦隊は、今又ペルシアの軍資によつて壊滅した。アゲシラオスが、折角小アジアに功業をたてながら、オリントス戦役の逼迫により歸國命せられるや、「ペルシア王は一萬の弓手を以て自分をアジアから追つた」と言つたが、蓋しペルシアの貨幣に弓手が刻んであることから、ペルシアの金がギリシア諸市を買収し、彼の歸國を餘儀なくしたことを諷したものである (Plut. Agesiāos. c. 15)。かくの如くペルシアが軍資を提供して、ギリシア諸市の内訌を助成したことは、ギリシアの運命に決定的な意味がある。

此のクニドス海戦の勝利はアテナイの運命を再び轉廻さすかにみえた。即ちアテナイの海上勢力が次第に恢復の徴を示したからである (Bischoff, Der zweite athenische Bund C. 1. SS. 633—676)。
(Bischoff, Die attische Politik seit Perikles, Anhang II. 86)。

コロンはクニドスの海戦の後全艦隊を率ゐてロス、ニシロス Nisyros, テオス Teos を降し、キオス、ミチレネ Mytilene, エフェソス Ephesos, エリトラライ Erythrai, キクラデス諸島を味方とした。之よりスバルタの海上の勢力は失墜し、キタラ Kythera の島をへも奪はれるに到つた (Diod. XIV. 84)。コロンはペレウス Peraeos に来り一旦リサンドロスによつて、四〇四年に破壊されたる城壁の再建を勧めたが (Diod. XIV. 85)、ペルシア方は五〇タラントンを寄せて助成してゐる (Cornelius Nepos, Conon 4. Xen. Hell. IV. 8, 9, 12)。長城の復活は、正しくアテナイ復興の容儀である。

アテナイは恐らく、此の頃レムノス Lemnos, インブロス Imbros スキロス Skyros の三島における舊軍事植民地も奪回した如くにみえる (Xen. Hell. IV. 8, 15) 又シラクサ Syrakousai のダイオニシオス Dionysios をスバルタの同盟から離れてアテナイと同盟せしめんとも企てたやうである (Lysias X IV. 19-20) 又キノロスの僭王エウアゴラス Euagoras がコロンを後援したといふのでキプロスからの救援に應じた (Lysias XIX. 21. Xen. Hell. IV. 8, 24)。ペルシア王と戦を交へてゐるエウアゴラスにアテナイが好意をしめすことは、ペルシアの不快とするところではなければならない。

アテナイとペルシアとの接近が産み出したかくの如き状態は、結局ペルシアにとつてはスバルタの牽制としては餘りに立ち入りすぎたものであり、スバルタにとつての危険は、海上における、従つてまた小アジア方面における、勢力の喪失のみにはとゞまらない。遂にアンタルキダス Antalkidas を

ペルシアの將軍チリバンズ Tiribazos の許に派遣してコノンを援助せしめぬことを畫策して成功した (Xen. Hell. IV. 8, 12)。然しアテナイはケルソネッスその他の植民地の挽回に努めスバルタの和平運動は效を奏しなかつた (Andokides III. 15)。即ちアテナイの復活は相當目醒ましきものがあつて、アテナイに昔日の勢威を奪回せんとする野心は明かであり (cf. Xen. Hell. III. 5, 10)。コノンの目的はことごとく此の見地から闡明すべきであらう。コノンが斥けられて後もアテナイはロドスの民主黨を助けてスバルタに對抗せしめたので (Xen. Hell. IV. 8, 20)、スバルタはロドスの貴族黨の後援に力を注いだ。

アテナイがロドス援助のためにトラシブロン Thasybulos を起用し、ペロポネソス戦役以來はじめての大艦隊四〇隻を派遣したのを以ても (Xen. Hell. IV. 8, 25)、如何に海上勢力の恢復に力を注いでゐたか知られよう。

然しながら更に達見なるトラシブロンは、ロドスの内訌が持久的なるべきをみて、轉じてトラキア、ヘレスポント方面に向つたのであつた。而も先づイオニア方面に立寄つて同盟諸市から軍資をえて出發するといふ周到な行動をとつたのである (Diod. XIV. 94)。

先づタソス Thasos をエクファントス Ekphantos の一派の力によつて獲得し (Demosth. XX. 59. cf. Hell. V. 1, 7) トラキアの王アメドロス Amedoros、セウテス Seuthes と同盟した。かくしてトラキ

ア沿岸の諸市の心を収め、次でアテナイとペルシアとの友誼關係にあるのをみてアジアの諸市が好意を示したので、直ちにビサンチオン Byzantion に航し、政體を民主制に変更すると共に、黒海より出港する船舶に一割の税 *dekate* を課した。對岸のカルケドン *Kalchedon* とも友誼關係を結び (Hell. IV. 8, 26-28) 完全にヘレスポントを支配することになつた。スバルタ方には、僅かにアビドス *Abdydos* が孤壘を守つてゐたにすぎない。

トラキア、ヘレスポントの支配を終へてからレスボスに航し、ミチレネ *Mytilene* を根據として活動し、メチムナ *Methymna*、エレンヌ *Eresos*、アンチッサ *Antissa* を占領した (Diod. XIV. 94. Xen. Hell. IV. 8, 29)。その頃サキトラケ *Samothrake*、テネドス *Tenedos* (Xen. Hell. V. 1, 7) シラツォメナイ *Klazomenai* (CIA II. 14b)、ハリカルナッソス *Halikarnassos* (Lysias 28, kata *Ergokleous* 12, 17) をそして恐らく他の小アジアの沿岸の市々も、アテナイの勢力の内に入つたのである。そしてシラツォメナイの場合の如く、五分税 *Eikoste* を輸出入に課し、恰かも第一次同盟の獻金 *Phoros* の如くに徴收した。かくしてトラシブロスの活躍は、アテナイ第二の全盛期であつたといふべきである。

かくの如き第二の盛期と雖も、その由て來るところはスバルタ牽制のためにペルシアから好意をよせられたにはじまり、之より多島海を、次でトラキヤ、ヘレスポント、小アジアに順次勢力を恢復したのであつて、その間ペルシアとの和親の關係はアテナイは之を無視するやに思はれ、ペルシヤ側に

おいてはスバルタの離間策によつてコノンを捕へたがなほアテナイ支持をつゞけてゐた。此の和親關係がヘレスポント附近の懐柔を容易ならしめたことは注目すべき點である。

デロス同盟の加入者が、そのアテナイに對する獻金 *Phoros* の故に不満であつた如く、第二の海上支配も亦此の點に不満を生じた。トラシブロスがアスペンドス *Aspendos* において殺されたのもかゝる誅求の結果であつた (*Xen. Hell. IV. 8, 30*)。畢竟戰の不安に對する結束と獻金とが、唯アテナイの政略的目的に轉用されんとするところに一方に不正があり他方に不満が生じたのである。

ペルシアにとつては、かくの如きアテナイの勢力の復興はペロポネソス戰役の昔に歸るものであつて、是以上アテナイを支持することの無意味に近いことは、既に三九二年にアンタルキダスの進言するところであつた (*Xen. Hell. IV. 8, 14*)。

スバルタが今や再び、アンタルキダスを起用して和平の事に當らしめたことは大なる成功であつた。乃ち彼は直ちにエフェソスに航し、副將ニコロコス *Nikolochos* をヘレスポントに孤立せるアビドス *Abvdos* に派遣してアテナイの糧道を妨げしめ (*Xen. Hell. V. 1, 6*) 自らはスサ *Sousa* において和議をすすめた。此の和議にして萬一成立せざる時はペルシアはスバルタと同盟することまで約定してエフェソスに歸つた。かくてアビドスのニコロコスを救援し、シラクサ及びイタリアよりの援助艦隊と合し

て遂にアテナイを破り、更にイオニア諸州よりの艦隊と併せて八〇隻を以てボントスよりアテナイへの穀物輸送を遮断するに到つた (Xen. Hell. V. 1, 25-28)。彼の畫策は、禍を轉じたのみならず、敵に匕首をむけたものであつた。ペルシアが漁夫の地位に立ちえたのは、また以てギリシア問題に對して投ぐるペルシヤの力の重要性に由來する。

アテナイは、ペルシアがスバルタと提携したこと、及び黒海よりの糧道を斷たれた今となつては、和議を納れるの他はなかつた。たとひ小アジアの都市がペルシアの勢力に歸しようとも、せめてレムノス、インブロス、スキロスの三島を保ちうれば、黒海との連絡についての利便が殘されてゐたのであつて、纔かにこのことを以て満足するの他はなかつた。かくて三八七年アンタルキダスの條約は結ばれアテナイがギリシアに唱覇することは遂に再び崩れたのであつた。此の條約は、テバイを目標として結ばれたと傳へられてはゐるけれども (Plut. Ages. c.23)、實は目標はテバイではなく、アテナイの再起打倒のためであることは贅言を要しない。

スバルタは、その名譽ある陸軍も今はイフィクラテス Iphikrates の率ゐる輕歩兵の訓練と進歩の前にレカイオン Lechaion に慘敗した (Xen. Hell. IV. 5, 11-17)。アンタルキダスの巧妙なる外交と海上制覇とによるに非ずんば悲運に際會するの他はなかつたであらう。而し此の條約によつて、ボイオチア諸市の聯合もコリントス、アルゴスの接近も妨げられ依然強國の位置を保ちえた。

アテナイとスバルタの兩國がいづれも小アジアのギリシア諸市をベルシアの手に委ねたことは、ひとり名分の上より覇者の地位を失つたのみにはとゞまらない。彼等の覇業に必要なべき軍資の出所を自ら放棄したものであつて、是によつて是等の二國によるギリシアの統一は、全く實現の望を失つたのである。

更に本來陸軍國であるベルシアが裁斷者の地位にたつたことは二つの重大なる結果を將來した。一つはアテナイの勢力失墜と共に海上を海賊の跳梁に委せたことであり、二つには平和の確保によりて傭兵を失業させたことである。後者は都市間の内訌を激化することにおいて生存の道を見出した（史學雜誌昭和七年十一月拙稿參照）。民主主義か寡頭主義かの争は、内訌のための主張であり、此の主張は失業傭兵によつて激化された。いはゞ窮民は生きんがために傭兵となり、生きんがために内訌し、かくて生きんがために亡びるといふ結果に陥つた。

四、ギリシア再生の力

ギリシアの土地は地勢的に小區劃をなして居り、之が文化的にも生活の様式にも發達の程度を異にしたことは人の注目せるところである。アテナイの産業と貿易とが盛になつた頃でも、オゾリス・ロクリス Ozolis Lokris, アイトリア Aitolia, アカルナニア Akarnania, その他の中部ギリシアの地は昔ながらの生治を營み、昔の狩獵的掠奪的な慣習の名残である帶刀が行はれたとツキデイデスは傳へてゐ

2 (Thuk. I. 5, I. 2)° アイトリア人の如きは野獸の如き生活だとポリビオス Polybios は彼の時代の姿を記録して居る (Poly. IV. 3)° だから四世紀に物々交換による國が多かつたとしても不思議はない (Xen. Poroi III. 2)°

かくの如き生活の程度の差、就中經濟生活の跛行がギリシアの實情であるならば、アンタルキダスの條約によつてギリシアの都市は爾今自治 *autonomos* であるべしと規定されたとしても所詮は行はるべきことではない。眞の平和は諸國間に平等が設定されてはじめて成立するといふエバミノンダス Epaniondas の主張は (Plut. Agesil. C. 27) 一面の眞理である。がそれが眞理であるだけに、ギリシアの實情は平和から遠き状態におかれてゐたといはなければならなかつたのである。

ギリシアの實情がかくの如く跛行的である以上は、小國の獨立は困難であり、さればとて全體を統一するには強大なる力によるの他には統合が容易でない。スバルタの如きは市民が武士としての訓練をもつが、他の諸國では陶工、鍛工、石工、木工等が必要に應じて軍人として従ふものが大多數である (Plut. Agesil. C. 26)° 他は傭兵の力に俟つのであつた (cf. Demos. III. Olynth. 35 等)° 之がためには相當の資金を必要とするのであつて、斯にペルシアの提供する軍資金から内証が助成さるゝ原因が秘んでゐた。スバルタ自身は國民軍が埃及に傭はれて出征するといふやうな有様であつて (Plut. Agesil. 36)° アンタルキダス條約以後は殆んど資金流入の道がたえたわけであり、ギリシア統一に向

ふ力もない。況してその兵の實力そのものすらもテバイ軍に遜色を見出すに到つては唱蹶の望みはたえたのである。

アテナイにしても辛うじてヘレスポントの糧道を保ちうる状態であつて、海賊の横行を制御する力を失つてゐた (Demos. Halonnesos 33)。アンタルキダス條約以後は、たとひ三七八—七年第二回のアテナイの同盟が結成されたとはいへ、それさへアテナイ人はアッチカ以外に土地領有を禁せられてゐるので昔の如き支配的なものではない (Diod. XV. 28)。たとひインクラテス Isokrates がアテナイを中心にして全ギリシアが結束してペルシアに當るべしといつたにしても (Panegyrikos) アテナイは最早昔日の力をもたぬものであつた。カリストラトス Kallistratos が、「また強健にして繁榮なる間に和平を講じたならば、過去におけるよりも更に偉大なる役割を演じうべし」(Xen. Hell. VI. 3. 17) と唱導しても、恐らく今はアテナイにとつてもスバルタにとつても、「強健な隆盛な時代」ではなくなつてゐたのであつた。

アテナイ的なるものと、スバルタ的なるものとは二つの對立せる流ではあつた。然し政治組織についてはそのいづれもの根柢において、同一なるものが横つてゐた。自由なる市民の平等と、他の自由ならざる階級に對する、及び他の市の自由民に對する、優越とを主張せんとすることにおいて同一で

あり、又そのいづれもにおいて法 *nomos* を規準として統治せんとするにおいて同一であつた。此の根柢における同一性は、部族國家より都市國家への發達路程において編成保存されたる原古的的信條に由來し、都市國家を最も完成せる政治形態とする釋義に發足する。いはゞ動かしがたきギリシア的基礎精神であつた。されば幾多のギリシア的なる政治學者理想國家論者があらはれても、彼等がギリシア的なる限り、此の都市國家觀と遵法の道念とより脱することが出来なかつた。政體を論ずれば、その單一の形式における長所と短所とを習合して混合政體をとくのみであつて、人間平等の精神に立脚し、或は世界的帝國を論ずることに及ばなかつた。又内部の改造を論ずれば常に法の優越と、法に對する殉教的の精神とを鼓吹し、市民の幸運を以て善法に依存せしめるのみであつた。偶々多數市民の貧窮が政治を腐敗せしむることはとかれても、その不幸救済のために、切實に生活構造を變改し選擇すべきところの力に論及しないのが常であつた。されば實際に即すれば、アテナイを中心にするべきカスパルタを中心にするべきかであり、高々兩者の協調にギリシアの將來を賭けんとするにすぎなかつた。然しながら四世紀前半のギリシアの情勢よりすれば、ギリシアを轉機せしむるに必要なものは、堅實にして強大なる力の出現であつた。既に獨裁政治への憧憬は四世紀の政治論のみならず、實質の上には全權將軍 *Strategos Autokrator* と呼べるゝものがあつて、軍事上の全權を委託さるゝのみならず、戰の結末についても全權を委ねられてゐた。アギスの如きそれである (*Thuk. IV. 2, VI. 26, VIII. 5*)。

或はスバルタの顧問 Symbolos (Thuk. III. 69, III. 100, VII. 39) アテナイの民衆指導者 Prostates tou demos (Arist. Ath. Pol. C. 20. §4), demagogos (ibid. C. 26. §1)等の出現は全く此の傾向のあらはれであつて、力が如何に要望されてゐたか知られるのである。

又力は素朴である。文化的儀禮の粉色を去つて残るところの人間原古の面目である。リクルゴス傳説の追慕と完成には、かくの如き素朴の要求されたる時代が背景に働らく。そこには單にスバルタの善法への復歸といふ歴史的回顧の感情のみが意味をもつのではなく善法によつて生ずると信じられた力そのものが希求されたる究極目的であつたのである。かゝる強力の發生のために、舊來の都市國家觀善法主義を以て果して充足なりや否や當時の情勢からみれば疑なきをえない。もし之を以て充足ならずとすれば、新らしき時代を荷ふ強力は如何なる素地に芽ぐまれたものでなければならなかつたか。

人或はいふであらう。斯にギリヘンツム Griechentum を脱却した世界的なヘレニスム文化の到來がある。

既にデモクリトス Demokritos はいふ、賢者に向つては全世界が開かれてゐる。何故なら卓越せる心にとつての祖國は宇宙であるから (Fr. 247) と。又エウリピデス Euripides は凡べての國は賢者の故郷であるともいふてゐる (Fr. 1047)。かくの如き世界的な精神は五世紀には明白にあらはれて居り、殊

にソフィストにおいては始めて人間の平等について論及したといつてゐる（ギリシャ史研究第十一章参照）。又實際に就いてみれば、傭兵の如きは同胞に對して同胞の敵と共に戦ふ場合もあるのであつて、彼等には生きることのみあつて祖國はない。アルキビアデス Alkibiades が、祖國を信じないのであつと問はれたときに、就中、「生きることにについては自分の母をさへ信じない」と答へた心持と（Plut. Alkibiades C. 22）一脈の通ずるものがある。然しながらかくの如き思想並びに行動の存在はやがて來るべきヘレニスム世界建設の一つの礎石たりうるとしても、それは世界帝國を産み出した直接の母胎ではありえなかつた。世界帝國の到來の前にはなほ「ギリシヤ人中のギリシヤ人」といふ自尊と、「ギリシヤ人の學校だ」といふ自負心が一と度くつがへされて、「ギリシヤ人とは生れの標識ではなくて思想 dianoa の標識であり、ギリシヤ人と呼ぶべきものは吾々の肉體をうけついだものではなくて文化 (Paidea) をうけついだものだといふ悲しきあきらめがまづ起らねばならなかつた。平等であり、自治であるといふ (Isok. Panegy. 50) 都市國家的自負心が、信賴し難しと目されたる專制君主 Tyrannos (Dem. I. Olynth 85) の前に先づ屈服しなければならなかつたのである。〔未完〕